

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会

編集 同窓会会報編集委員会

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2

TEL(029)822-0137(代) FAX(029)826-3521

ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>



改修工事が始まった旧本館校舎

土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠馬 作曲

一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水

二、春の彌生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

- 2頁 会長あいさつ
学校長あいさつ
- 3頁 平成28年度総会報告
新任職員紹介
- 4頁 卒業60周年記念同窓会
卒業50周年記念同窓会
卒業40周年記念同窓会
- 5頁 120周年記念事業
- 6頁 恩師を訪ねて
- 7頁 卒業生レポート②
- 8頁 支部・OB会だより
- 9頁 母校だより 職員室だより
- 10頁 部活動報告
- 11頁 進路状況報告等
- 12頁 平成27年度決算報告等



同窓会会長あいさつ

幡谷 浩史

(高4回・併2回)

同窓会会員の皆様にかかれましては、当会運営に対しご支援・ご協力をいただき誠にありがとうございます。お陰様をもちまして当会務も順調に進み、120周年に向けて万端遺漏なく進捗しております。

「災害は忘れた頃やってくる」伝承された如く、昨年9月の関東東北豪雨(線状降雨帯)による鬼怒川堤防決壊(上三坂地区)大洪水は、常総地区の1/3が浸水するという大災害となりました。行政当局をはじめ公共機関、関係地域団体、個人も含め総合連携の必要性を実感させられ、「向う三軒両隣」の大切さ、日頃のお付き合い等、改めて再認識をしました。一刻も早い復興を願っています。

2020年までに人工知能やロボットの進化によって世界で710万人が職を失い、200万人の雇用が生まれるという話を聞きました。アメリカでは、小売店販売員・レジ係、事務員は勿論のことCTスキヤン等の画像の診断をする放射線科医や弁護士が消える職種とされています。しかもロボットは消費せず税金も払いません。日本では、エネルギー・食料の自給率を上げ、更にもっと国際競争力を高めておかないと、財源不足のためにロボット

が使用いたくても使えず、益々人手不足となり介護分野が失業者の受け皿になるという事になるかも知れません。地球温暖化の影響を含めて、誰も予測する事の出来ないこれからの激変する世界に立ち向かわなければならぬので

さて、創立120周年事業である旧本館(国重文指定)大改修の施工業者が決定し、すでに工事も始まり期間内に完了すべく鋭意進行中です。しかしながら募金目標金額8千万円は未到達であります。そこで再度関係各位と併せ、学年幹事・支部関係者にお願する事になっておりますので、いま一段のご支援をお願いする次第です。その他卒業生一同(学年別)の記念植樹等が100年近く経過すると巨木となり旧本館を傷め、維持費等の負担が大きくなり、今後の課題となるので、中庭も含めた総合的な造園計画が必要かと考えております事を合わせて報告いたします。

今年度は名簿改訂・発行の時期となり、関係各位、特に学年幹事、地区支部関係者が前回同様OB各位に対し、連絡や消息を把握すべく活動しておりますのでよろしくお願い致します。



学校長あいさつ

学校長 横島 義昭

進修同窓会の皆様方にはご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃より物心両面に渡り多大なるご支援を賜り厚く御礼申し上げます。特にこの春の文化部室及び新校旗のご惠贈につきましては深く感謝申し上げます。

県内有数の大規模校・伝統校、全国屈指の進学校である本校に着任して2年目、「不易流行」と「ATG(明るく・楽しく・元気よく)」をモットーに尽力する所存です。皆様方のお力添えをよろしくお願いいたします。

さて、本校全日制では、特に力を入れていたのが、「高い知性」と「豊かな人間性」を兼ね備えた「社会の役に立つ人材」及び「国際的に活躍できるグローバル人材」の育成です。「社会の役に立つ人材」育成のため「高い知性」獲得に当たっては、授業第一主義を掲げ学力向上に努めています。このため平成28年度入試では、東大合格18人(全国公立高校第10位)など素晴らしい結果を残しています。また、「豊かな人間性」を養うため、部活動や委員会活動を積極的に奨励しています。部活動加入者数は県内3位であり、テニス部が高校総体県大会で優勝、硬式野球部が夏の県大会3回戦進出となりました。本校自慢の一高祭の伝統が力強く引き継がれています。「国際的に活躍できるグローバル人

材」育成は、文科省の「SGH(スーパー・グローバル・ハイスクール)」の研究指定を受け3年目。生徒はオーストラリアやマレーシアでの海外フィールドワーク等の活動を通して、考える力や伝える力、英語力を磨くとともに、視野を広げ驚くほど大きく成長しています。学校全体が活力に満ち、また高校入試の志願倍率が上がり、一高の進むべき新たな方向性が示されているような気がいたします。

次に、創設68年を迎える本校定時制。生徒数102人と小規模ですが、志願倍率が高く人気校です。剣道部の全国ベスト8など活発な部活動や楽しい学校行事が数多くあり、アットホームな雰囲気、温かい給食が大きな魅力です。この春の卒業式では、県内最高齢(85歳)の卒業生が答辞を述べ感動と勇気を与え大きな話題となりました。

今後とも魅力向上に努め信頼される学校作りを取り組み、本校発展のため一杯努力する所存です。皆様方からのお願いとご指導ご支援を賜りますようお願いします。同時に、進修同窓会のご活躍を祈念してご挨拶いたします。尚、本校の魅力を身近に実感していただくため、本校HPを全面リニューアルいたしました。是非ご覧下さい。

平成28年度

進修同窓会総会開かれる

去る4月9日(土)に平成28年度進修同窓会定期総会が、母校体育館において、周年祝賀卒業生を含む550名という大勢の皆様のご出席を得て、盛大に開催されました。

総会は、應援指導委員会の元氣いっぱいのリードと吹奏楽部の素晴らしい演奏に合わせて、校歌・応援歌・一高讃歌を全員で斉唱することから始まりました。続く幡谷会長と横島校長の挨拶の後、平成27年度事業報告・決算報告、平成28年度事業計画案・予算案、役員改選案が原案通り可決承認されました。更に、創立120周年記念事業、次年度以降の総会日等も原案通り可決承認され、特に、創立120周年記念事業の完遂に係る募金が、目標額8千万円に対し、現在はその7割弱にとどまっていることから、尚一層のご協力を広くお願いする募金委員会の設置も承認



幡谷浩史会長の挨拶

されました。その後、役員退任者2名に対する感謝状の贈呈、本会が助成する事業の一つである、今回が7回目の生徒海外研修(Science Explorers Group)参加者・生徒38名・引率教員3名、期間・2016年3月17日～3月27日、訪問地・ワシントンDC・ボストン・ニューヨーク)に参加した生徒達からの成果報告があり、総会は終了しました。

続いて、卒業60周年(高8回・定6回)、卒業50周年(高18回・定16回)、卒業40周年(高28回・理数5回・定26回)、卒業25周年(高43回・理数20回・定41回)、卒業15周年(高53回・理数30回・定51回)の節目を迎えた皆様に対する卒業周年祝賀式が挙行されました。宇田川仁一郎氏(高19回)の祝辞、幡谷会長から臨席者への記念品贈呈があり、最後に高山了氏(高18



応援指導部のリードのもとでの校歌斉唱

回)より謝辞が述べられました。この後、会場を移し、各周年・参加者の懇親会が、それぞれの幹事のお骨折りで催されました。ここでは、恩師や旧友との再会を喜び合うとともに、思い出話や近況報告などに花が咲き、大いに盛り上がりしました。

尚、総会に先立ち、創立120周年記念事業の一環として、本会の援助により新築完成した文化部室の寄贈式及び感謝演奏会(弦楽部・吹奏楽部)が、幡谷会長・横島校長をはじめ同窓会・学校の関係者80名のご臨席を頂いて、同室で厳かにして華やかに行われました。

卒業60周年記念同窓会

—いま暮る母校への思い—

高8回 山本 嘉子

卒業後を東京に暮らして60年、今年4月、最後になるという周年記念同窓会の招待を受けて母校を訪れた。校門を入ると直ぐに現れる旧本館、その前にひと時佇めば、一気に在籍当時の自分が蘇ってくる。

同期に女子生徒は4人、共学とはまだ名ばかりの頃で、女子には何かと不便も不自由も多い3年間だった。世間の空気も決して今のよう自由で開放的ではなく、終始居場所のない心地で過ごした記憶が残っている。

受けた授業はどの科目も充実した内容であった。ただ体育の時間は殆ど見学で、偶に先生の指示でタイムやスコア



の記録係となる。数学の時間には、女子に必要なしと、今思えばそのような偏見に出合ったことも確かな事実だった。

上京後、学生で4年、社会に出て65歳まで働く間には、人の暮らしや考え、社会情勢も大きく変化して。その長い間を、土浦からも母校からも遠く暮らしていた。

再び母校「一高」と同期生が自分の中に戻ったのは10年前、卒業50周年記念同窓会の案内だった。半世紀の間、糸の切れた風のようだった自分が出席を迷う中に、思いがけず数人の旧友から誘いの連絡があった。皆が68歳になっている。

その後、10年を経ての今年だが、大半が社会の一線を退いて、あちらこちらに交流の輪が復活して広がっている。異なる世界に生きた皆が、其々の話題を持ち寄る場は、

新任職員紹介

教頭 川上 弘



今年四月に赴任いたしました川上です。

進修同窓会の皆様の熱心な活動を日々実感しております。伝統ある本校の発展のため、微力ではございますが、尽力いたしますのでよろしく願います。

事務室長 荒木 克義



この度の定期異動で土浦一高に赴任しました荒木と申します。

日頃より同窓会の皆様のご活躍には、感謝申し上げます。微力ではありますが、同窓会幹事として努力してまいりますので、どうぞよろしく願います。

ふる里訛りの座談、歓談で賑わう。その中に気軽に交じれる今が、居場所の無かった昔に重なり、懐かしさに心が解けていく。残念なことは、同年に卒業した350余名のうち百数十名の方が、既にこの世にないことだ。今年4月9日、記念同窓会に集った同期生は90名弱。女性には2人。母校の今で何より驚いたのは女子生徒の数の多さだ。開会早々

に登場の応援団にも管弦楽団にも女子生徒が堂々と、伸びやかに活動している。海外研修を体験した生徒は、生き生きとその報告をする。わが母校は文武両道を誇る理想の共学校として、今や眩しいばかりの発展を遂げている。60年を経てこの日は、母校が自分の中に新しい姿で輝く日となった。

このよき日を設けて下さった進修同窓会と、開催に向けてお骨折りに下さった皆様に、心から感謝申し上げます。

併せて、創立120年という記念の年を目前に、母校の一層の発展を心からお祈りいたします。

卒業50周年記念同窓会

高18回 河合 隆

平成28年4月9日(土)「進修同窓会定時総会・記念祝賀式」が開催されました。高18回卒の過去の周年同窓会は、20周年(昭和61年)145名、25周年(平成3年)166名、40周年(平成18年)142名の参加者であったが、本年50周年は170名と大勢の参加者でした。

総会の様子は割愛しますが、祝賀式では各周年卒業生を代表して高山了君(18回卒同窓会実行委員長)が代表謝辞を行いました。さわりだけを抜粋します。『さて、今年も早くも4月。8カ月で新年を迎えます。そうですよ……皆さん、来年は待望の「古希、70歳」ですよ。古希になると、晴れて「新選組」に入隊できます。身体のあるところが痛み出し、昨日も痛み今

日も痛い、今度も痛い！隊長「近藤いたみ」。年を取ると、肘や肩がコキコキ言いだして辛い。副隊長「肘肩歳三」。年を取ると朝が早い。お犬様に連れられて早朝散歩。それでも時間を持て余し、家の周りを掃除する「沖田ら掃除」。とユーモアを交えた軽妙な祝辞で、式典が長くなり少々疲れ気味の参加者の心を和ませました。

戦後まもなく生まれ育った我々は、工業化を支えるために、中学校卒業生が「金の卵」といわれた14歳の子供が集団就職列車に乗り、故郷を離れ、都会に就職しなければならぬといった貧しい時代を過ごしました。シンボルであり誇りでもある旧校舎での授業も、冬はオーバーを着込み手袋をして寒さをしのいだものでした。

団塊世代1期生といわれる昭和41年卒は、438名と同期生が多く、激しい競争に晒された世代ですが、学業を終わる頃には、類を見ない「いざなぎ景気」と言われる高度経済成長の真っ只中。就職に困るわけでもなく、給料も右肩上がり、

「今日は昨日よりも良く、明日は今日よりも良くなる」、「大きいこととは良いことだ」、「マイカーブーム」と世を謳歌できた世代でもありました。皆自分の理想を追い求められる時代、歴史的にも稀な70年間の平和な時代を過ごしました。今日の若者の置かれた状況を考えると、「昔は良かった」で済ますことなく、残された時間を各人の経験や立場から社会に奉仕

をして、お返しする責任があると痛感するところで。

記念同窓会は10年振りとおつて、あちこちに輪が出来、話が弾むのもいつものとおりです。この日のために31名の各クラス幹事によって実行委員会をいち早く立ち上げ、以降6回の委員会を開催しました。クラス幹事の皆さんにとって、大曾根・川村・鶴巻各先生及び友部先生の各恩師がお見えになったこと、さらにいつもに増して大勢の同窓生が参加してくれたこと、はたまた創立120周年記念事業への募金も120数名、250万円を超える協力がありません。これが、何よりの慰労かと存じている次第です。感謝を込めてご苦労様でした。

次回の18回卒同窓会は東京オリピックの年2020年に開催することに決定しています。皆さん、4年後も元気でおいしませよう。

卒業40周年記念同窓会

高28回 塚原 靖二

平成28年4月9日、進修同窓会より卒業後40周年のご招待を受けて、私達高校28回卒業生約100名が母校に参集致しました。記念祝賀会は、体育館にて在校生の吹奏楽部・弦楽部・応援指導委員会の校歌斉唱・エールを受けて開式となりました。続いて、進修同窓会の諸先輩方からのご祝辞ならびに記念品を頂戴致しました。同窓生と共に母校へ登校し、土浦一高時代

の思い出に浸るひと時を過ごすことが出来ました。歴史と伝統ある進修同窓会のご厚情に、高28回卒業生を代表し厚く御礼申し上げます。

記念式典の後、学年同窓会をホテルマロウド筑波にて開催しました。恩師の先生方にご出席を賜り、同級生一同青春時代に戻り大いに盛り上がりしました。

さて、私たちは普通科8クラス、理科数科1クラス、総勢354名で、昭和48年4月に入学し、昭和51年3月に卒業致しました。

ご指導いただきました先生方、遠藤俊夫校長先生、学年主任の大塚栄先生、副主任の大曾根宏亮先生、担任の久保田坦先生、小沼三郎先生、株木実先生、小田潤先生、原尚道先生、下代恒夫先生、松崎一先生、山本茂先生、長壁英進先生、戸祭秀雄先生でした。

私たちが入学した当時は、1年生は新校舎で学び、2年生・3年生の時は国の重要文化財に指定されている旧校舎で学ぶことが出来ました。私たちが旧校舎で学んだ最後の学年だったのではないかと思えます。明治37年に建設された木造校舎は、明治政府の教育を重視する姿勢が具現化された建築物であり、100年の時を超えて、今も堂々とした威厳ある建築です。明治・大正時代を感じさせる素晴らしい校舎でした。天井が高い校舎内は夏とても暑く、冬は寒風の吹く自然溢れる環境であり、日本の

四季の変化を存分に感じながら忍耐強く授業を受ける事が出来ました。夏目漱石の坊ちゃん先生も同じような校舎で授業をしたのではないかと想います。旧制中学時代のパンカラな校風の伝統が残っていて、お陰様で自由な校風の下で生き活きとした学生生活を過ごす事が出来ました。一高祭、水戸一高との土水戦、昭和49年茨城国体開会式への参加、筑波山遠足など母校で過ごした青春時代の思い出は尽きる事はありません。

歴史と伝統ある土浦一高で、青春時代を過ごせた事は、まさに私たちの誇りです。最後になりますが、創立120周年を迎える土浦一高並びに進修同窓会の益々の発展と会員の皆様のご健勝とご活躍をご祈念申し上げます。



120周年記念事業

日本館耐震改修工事

日本館改修工事に備え、昨年11月から日本館内部の展示資料等の整理を、職員や同窓会日本館活用委員が中心となり進めました。続いてそれを文化財専門の業者の手により、体育館の空きスペースや本館空き教室へ収納する作業を行いました。工事後、再度展示するために、資料の保存状態に留意しつつ、慎重にも慎重を期して保管に心がけているところです。

そして、本年6月から、平成30年6月の完工を期して、日本館の改修工事が始まりました。今年10月中旬の工事状況は、写真で見ている通り、内部の床や腰板を取り外した状態です。これも、それぞれの部材を、元通りに戻す必要から、番号を付ける等の慎重な作業が続けられています。

また、外観は、全体に足場が組まれ、屋根瓦を撤去し新たに天然の瓦(国産のものは入手困難のため、カナダ産を使用)で葺くために、建物全体が覆い屋で保護されています。

創立120周年にあわせて、平成29年に完工し、同時に記念式典を執り行うのが本筋ではありましたが、先に触れました通り、平成30年6月完工の予定となってしまうました。しかし、記念式典は平成29年11月18日に開催を予定しています。

ところで、既にご案内の通り、

改修工事等の為に、同窓生の皆様から8千万円を目標とした浄財のご寄付をお願いしてきましたが、10月末現在で、寄付金額は6千万円強にとどまっている状態です。このままでは予定した工事等を進めることが困難になることも予想されます。

このような状況をご賢察の上、本会報とともにお送り致しました振り込み用紙にて、ご寄付賜りますよう、あらためましてお願い申し上げます。



同窓会が新校旗を寄贈



創立120周年記念事業の一つとして、2月29日に新校旗の寄贈式が開かれ、全校生徒の前に大曾根宏亮副会長から横島義昭校長に新校旗が手渡され、お披露目されました。

1957年に作られた校旗は、修繕が不可能なくらい痛みがひどいため、新調することになりました。新校旗も、同じ図案で、サクらの花びらと流水の校章を細やかに刺繍したものです。

横島校長は、「校歌の『桜水の旗立てて我が校旗を輝かせ』の通り、ますます校旗を高く高く打ち立てて一高を輝かせていきたい。」と語りました。

また、同時に新校章旗(140cm×210cm)が太田親伯生徒会長に手渡されました。この校章旗は県の高校総体総合開会式等で使われます。

同窓会が部室を恵贈

文化部振興のための「文化部室」が、4月9日の同窓会総会当日に、同窓会から恵贈されました。日本館を練習場に活動していた吹奏楽部と弦楽部は、日本館の改修工事に伴い練習場所がなくなるため、同窓会に支援をお願いしたところ、創立120周年記念事業のひとつとして、文化部室を体育館の東側ピロティに建設していただくことになりました。完成した部室で、幡谷浩史会長から横島義昭校長に目録が手渡されました。幡谷会長からは、「これからは遠慮なく音を出して、大いにレベルアップをしてください。」と激励の言葉がありました。吹奏楽部の相島優里部長は「このすばらしい練習環境の下、日々練習に励んでいきたい。」と感謝の気持ちを表しました。寄贈式のと、吹奏楽部と弦楽部による感謝の演奏会が行われ、出席した同窓会員は音色を楽しみました。



一高祭実行委員会が同窓会に寄付



創立120周年記念事業の一環として着工される「旧本館」耐震補強工事費用に役立ててもらおう目的で、代表生徒が幡谷浩史会長に寄付金を寄贈しました。第69回一高祭で生徒が作製したTシャツやタオル、クリアファイルなどの記念グッズ及び応援指導部OB会作製のネクタイやネクタイピンなどを販売した売上金の一部の目録を、来年の一高祭実行委員長岡野崇史君、副委員長関博華君が幡谷会長に手渡しました。幡谷会長は「大事に使わせていただきます。皆さんの気持ちを多くの同窓生に伝えたい。」と感謝の言葉を述べました。

恩師を訪ねて

国語科 戸部 守先生

昭和53年4月、昭和63年3月在職



【はじめに】

今回は戸部先生をお訪ねしました。水戸商業高校をスタートに幾多の高校を歴任され、竜ヶ崎一高校校長を最後に教師の道を全うされました。先生はいずれの学校にあっても生徒と真摯に向き合い、支援する揺るぎない信念を貫かれました。退職後も情熱は衰えることなく、中国の学生教育に力を注がれました。教科はむろん部活動にも熱心で軟式野球部監督として活躍され、関東大会昭和59年)で、強豪作新学院を破る金星をあげました。現在は牛久市にお住まいで、悠々自適の日々を送られています。以下先生の回想の記です。

【生粋の水戸っポ】

水戸で生を受け、学校教育は水戸で受けました。小学校・中学校は水戸でそして大学も水戸です。よく水戸の三ボイといわれますが、見事にその気質を受け継いでいます。いや、80歳になってむしろますます強くなっています。水戸の三ボイとは「理屈ッボイ」「怒りッボイ」「飽きッボイ」です。昭和20年8月2日の大空襲の時

も水戸に居ました。よくテレビドラマで空襲の場面を見ますがまったくそのとおりでわれわれ家族は空襲警報が出て自家製の防空壕に避難し、自宅が火の海になるのを見ながら壕は危険だから火の来ない場所へと危険を承知で少し離れた崖下の溝へ逃げ込んだのです。小学校は焼失し、隣接する弘道館は焼失を免れてそこで授業を受けたのですが、畳に正座なのです。後に弘道館が水戸藩の藩校であり、そこで学ぶことがどんなに意義深いものであるか知りませんが、小学4年生のわたしにとっては苦痛だけでした。日ならずして終戦。

【教師になって】 大学を卒業後、教師の道を歩むことになりました。ところがまたしても水戸の地で教師生活が始まります。最初の赴任先が水戸商業高校でした。(派遣先は勝田市分校です)分校は開校3年目の定時制高校でした。4年後に転勤しますがこれもまた水戸で、創立初年度の緑岡高校でした。また土浦一高の後の勤務校は牛久栄進高校ですが、創立2年目の高校でした。

38年間の公立高校の教員生活は新しい歴史を作ろうとするこれらの学校と長い伝統を持つ土浦一高・水戸一高そして最後の勤務校竜ヶ崎一高と伝統校と新設校という両極端でした。

【土浦一高での10年】

水戸での20年の勤務の後、土浦一高には昭和53年4月に着任しました。すぐに3学年の学級担任を

命ぜられ、これには驚きました。学年にしても教科にしても錚々たる先生方で、しかも自信溢れる指導をしてもらったのです。1年間でこの先生方に伍して進路の指導をしなければなりません。まず生徒を知る事が大事と個人面談を繰り返します。夏休みにはクラス全員の家庭訪問をして休み直前に提出させた学習計画表を基にして学習の進捗状況を点検するのです。親が不在だからと婉曲に断つてくる生徒もいましたが「親は関係ない。君さえいればいい」と言っ

て、3月の卒業時にはそれ相応の結果を残せました。 いまでも思い出すと汗顔の至りですが、ある生徒が一橋大学と慶応大学と同時に合格してどちらに進学すべきかと相談に来た時です。前任校の緑岡高校もほとんどが進学志望でしたが、創立当初でしたのでそのような相談は受けたことはなかったのです。他の先生には恥ずかしくて相談できませんので、慌てて校長室に飛び込んで相談し、一笑に付されました。

その後、引き続き担任を希望しました。夏休みの家庭訪問は生徒の3学年時には必ず実行しました。国語の教師でしたので、短期間で生徒の実力を上げるためにはどうしたらいいかを考えて、思案の末、夏休みの前半で、基本古語を習得させよう、担当のクラスに休み直前にひとり10枚の葉書を提出させ、その1枚に20枚の葉書を印刷して、隔日に発送ご家庭では一日おきに葉書が来るのでさぞ迷惑だったことでしょう。

やがて学年主任になります。着任後7年が過ぎていました。入学式の呼名のあいだ中、希望に燃えて入学してきたこの子達のために

わたしは何をすべきかを考えていました。幸いなことに学級担任がその個性を発揮してクラス経営にあたり、学年主任は学級担任の意向を集約して学年経営をしてゆくというように学年の意見が尊重されていたと思います。

2年間があつたという間に過ぎていよいよ卒業の学年になります。まず少しでも早く自己の進路についての意識を持たせたいと思いい、「進路旬報」なるものを4月中旬から発行し、12月下旬まで通算22号を発行しました。いろいろな反応があつて、教室の黒板に逆さに吊るされたり、上履きの跡もくつきりと廊下に散らっていたり、一方で丁寧に読んでくれて、誤字を指摘されたりとさまざまでした。

大詰めの冬休みには、居ても立ってもいられなくなって自分で東京の予備校に通いました。受講したのは漢文です。漢文なら共通一次試験で文系でも理系でもすぐに使えるものもくろみがあつたからです。この講座には本校の2名の生徒が受講をしていて、わたしの姿を見てびびり、教師と生徒が一緒になつて予備校の授業を受けたのです。1月の授業が始まるまで全クラス(わたしは全員の生徒を把握したい)の思いから、週1時間の漢文の授業を全クラス持たせてもらつていたので、講習で仕入れてきたばかりの知識を伝授して、今年絶対「再読文字」が出題されると学年全体に触れ回ったのです。ところがふたを開けてみたら、再読文字の一文字たりとも設問にはありませんでした。卒業式の主任挨拶で、このことを披露しました。卒業生は大爆笑です。

最後の総仕上げとばかりに、東京大学の合格者発表を見に行きました。受験番号と合格者番号を

き合せるとそれこそポロポロ合格者が出てくるではありませんか。嬉しくてたまりませんでした。二次発表の2名を加えて15名の現役合格者が出たのです。永年のライバルであった母校の水戸一高を初めて上回る学校が出来たのです。のちに受験雑誌などで、土浦一高が伸びたのは研究学園都市のおかげなどと書かれたり、また巷間言われたりしましたが、少なくともこの学年の東京大学の現役合格者15名の内訳は当時の土浦市内5名、土浦市近郊5名、学園都市5名と、奇しくも同数だったのです。

【土浦一高を離れて】 10年はいくも過ぎて、牛久栄進高・水戸一高・友部高・竜ヶ崎一高と残りの8年間で4高校に勤務し、平成8年3月に退職。退職後1年間常総学院に勤務。

思い切つて茨城の海を飛び出してみよう、出るのなら海外へ。幸いにも中国で日本語を教える機会に恵まれました。中国では東北部の長春の中高一貫校で1年、翌年から上海の同济大学で2年、日本語や日本文化を教えました。

帰国後は東京新橋の国際善隣学院で、中国から日本の大学へ進学させるための指導をしたのです。そして平成21年9月にすべての教師生活を終えました。中国の学制では10月が学年始めなので半年間の休業期間がありますが大学卒業後51年間学生・生徒と直に向き合つてきました。その間1年のプランクもありません。

【現在は】

俳句と囲碁三昧、月に2度ほど句会・碁会で上京、楽しんでいます。 教へ子の講演聴きて冬ぬくし 守 露霜に逝きし教へ子またひとり 守

卒業生レポート

②

「エンジニアリング産業に身を置いて」

高17回

久保田 隆



私は昭和40年に第17回卒業生として本校を巣立った久保田隆です。卒業後50年を迎え、これまで従事してきたエンジニアリング業界から退任したのを機に、進修同窓会からの勧めもあって、この度拙文を寄稿するものである。

1. エンジニアリング産業とは

今でこそありふれた言葉になったが、エンジニアリングとは夢を形にする学問で、一般的には工学と訳される。実際には Science (科学) Technology (工学) Arts (芸術) を融和させた学問で、ただ単に設計・製作して実用に供すればいいものではなく、そこには設計者の人間性が深く反映されるものになっている。

目下日本は高度な技術を中核にして質の高いインフラ設備を輸出する大きな目標を掲げている。これらの設備はエンジニアリングを駆使して、設計・施工し試運転を経て、発注者である顧客に引き渡されることになり、エンジニアリング産業の関与なしには成り立たない。

2. 土浦高時代

私の生家は、現在の石岡市八郷地区であり、筑波山系に囲まれた盆地の中の農村地帯である。過疎化の波は押し寄せ人口も随分減少しているが、つくば学園都市の後背地帯として最近はまだ活性化しつつあるとも聞いており、恵まれた自然と生産物を活用しての地域振興策は興味を引かれるものである。よく登山を重ねた筑波山から見た、光る霞ヶ浦と周りの平野、まさに沃野一望数百里の風景は忘れられないものである。

当時の八郷地区のイメージは、都市部を離れた在の在の町、草深き田舎であった。事実入学してみると土浦近郊のいわゆる開けた地域の生徒が多く、山国生まれの小生は当初はややもすると萎縮していたが、半年もすると徐々に馴染んでいった。今でこそ気にならないが、当初はいわゆる北関東なままりの言葉であった、自分で恥ずかしい思いをしなから矯正したものであった。

さて、一高生活、名うての受験校、勉強には随分と手こずったものであったが、今となってみると当時教え込まれた多くの事が社会人となっても時々役に立つこともあり、世に言う程度勉強も悪いとも思えず、先生方の教育がしっかりとしていたからであろうと思うと、大いに感謝する次第です。

3. 大学生活

3年間の受験勉強時代を終えて、多くの仲間と共に、杜の都仙台での

大学生生活を4年間楽しんだ。当時の仙台は、高層建物が建ち並ぶ現在からは想像出来ない、ローカル色豊かな雰囲気のある町であった。専攻は化学工学、石油・ガスや石油化学のような炭化水素を扱う設備に必要なプラントを設計する学問を学ぶ分野であった。当時の日本は第二次石油化学コンビナートの大展開時代、鹿島地区を含めて全国に7か所のコンビナートが建設され、銀色に輝くプラント群と夜空を焦がすフレアースタックは、日本の高度成長のシンボルであった。在学中より銀色のプラントの勇姿に憧れ、就職先も迷うことなくプラントエンジニアリング業界へ。

仙台での学生生活、親元を離れたの下宿生活であったが、下宿のおばさん、先輩方の御世話になりました。夏はとも角冬の仙台は寒風が厳しく、熱燗は手放せないものとなっていた。しかしながら、自然環境は素晴らしく、特に秋の紅葉は目を見張るほどの美しさであった。

さて、杜の都とも別れを告げ、いよいよ社会人。就職先はプラントエンジニアリング業界の雄、千代田化工建設であった。夢を持って入社したものの、厳しく優しい先輩方から作り上げた書類を真赤にして返される訓練を経て、どうやら技術者としてプラント設計に入り込めたものである。

4. 社会人としての生活へ

入社当時の1969年(昭和44年)は、日本に於ける第一次石油・石油化学コンビナート建設もほぼ終了し、業界としては不況期であった。しかしながら第一期コンビナート建設の胎動が始まり、一方でIBM360を利用してのコンピューター時代のパンチカードと格闘する日々でもあった。

又、従来の会社業態では経営も

成り立たないとの判断により、全社国際化の掛け声の下での海外プラント輸出の推進が強化されていた。一方で深刻度を増してきた環境汚染を低減する為の技術開発にも注力し、石油製品の硫黄除去、燃焼排ガスの浄化の二酸化硫黄除去、汚染水の浄化に取り組み、次々に商品化していった。これに加えて、無公害燃料として1969年に発電所や都市ガス用にLNG(液化天然ガス)の輸入が始まり、前述の脱硫技術との組み合わせで、日本の環境汚染は劇的に低減していった。

5. プラント輸出と海外オペレーション

我が国は自国で産出する天然資源は殆ど無いに等しく、当然の事ながら石油、天然ガス、石炭は輸入に頼り、その安全確保は国のエネルギー政策上最も重要なこととなっている。特に天然ガスは産出国からの輸入は輸送し易い液体にせざるを得ず、ここにLNGプラント市場が発展してきた。

私も海外のLNGプラント建設に於いては中東のアブダビに始まり、次いでインドネシア、カタール、サハラ、パプアニューギニアと次々にプラント建設及びプロジェクトマネージャーとして関与していった。ひと口にLNGプラントと言っても、1980年代頃は数百億の規模であったが最近では兆円を超えてきており、期間も4~5年かかる。

この様に非常に金額も大きく期間も長くなる、プロジェクトの遂行期間中に起きるかも知れない数々のリスクをあらかじめ想定してその対策を検討しておく、万単位の労働者を使いながら、これらを全部海外で行うことになる為、プロジェクトの完了までには多大な労力が必要となる。まして、為替相場が1ドル=100円レベルの話となると、日本人を多用する事はコスト面で不利になり、どうしても人件費の安い海外の方々との協力が不可欠となる。

プラントエンジニアリングは、将来的にはAI等の活用で大きく変わろうが、基本的には労働集約型である。私は1987年から約8年間インドネシアに赴任し、現地政府の要請による地場のエンジニアリング企業を、プロジェクトの遂行による実務経験を積みながら育成をした。結果的に言うと、当初150人規模であった地場の会社が8年後には1000人規模にまで成長した。現地の方々との協業は決して楽ではない。それぞれに自分達としてのプライドを有し、そこに頭越しに接しても決してモノにはならない。日本からの30数名の社員に口を酸っぱくして説いたことは、相手の目を見て話せ、日本人が彼らより優れているとは思ってなかった。

この様な経験を積んで、2007年より千代田化工建設の社長・会長を拝命し、相談役を経て2016年6月に退任する人生を送ってきた。

6. 日本人と海外展開

この狭い日本が長期に互り繁栄を続けていくには、独自の技術を持って自由貿易を拡大する以外にはない。天然資源に恵まれない以上、残るは人材のみ、受験勉強に明け暮れる合間に、いわゆるリベラルアートを身につけていき、艶のある日本語のある日本の生活の原点を理解し、日本文化を世界に誇れる人材を育てあげることが必要であると思う。

小生の拙文がその為に少しでも参考になれば幸いです。

略歴

- 1965年 土浦第一高校卒業
- 1969年 東北大学工学部 化学工学科卒業
- 同年 千代田化工建設入社
- 2007年 代表取締役社長
- 2013年 代表取締役会長
- 2015年 相談役
- 2016年 退任

支部・OB会だより

水戸支部

修同窓会水戸支部は、毎年6月に県庁進修同窓会と合同懇親会を開催する事が近年恒例となっており、今年も去る6月21日(火)18時30分より水戸三の丸ホテルで実施されました。ご来賓には茨城県知事橋本昌様、進修同窓会長幡谷浩史様、土浦第一高等学校校長横島義明様をお迎え致しました。参加者は水戸支部33名、県庁進修同窓会58名、ご来賓を含め、約100名のにぎやかな宴となりました。

県庁進修同窓会嶋田会長、進修同窓会水戸支部大竹支部長の主催者側挨拶に続き、ご来賓の橋本知事からは、出身高校別職員数は水戸一高が一番多く約350人程、土浦一高は250人位で三番目である。現在の学生達に将来県庁へ入庁するように皆さんからよく指導をして頂きたい。優秀な土浦一高卒業生が茨城県発展の為に活躍されますよう宜しく願いたい旨のお話がありました。幡谷浩史同窓会長は、創立120周年に触れ実行委員会が既に組織され、旧本館改修、記念行事(記念式典・講演・祝賀会)、120周年記念誌発行、新しい校旗の贈呈、部室改修等様々な事業が企画され、一部はすでに実施されており、記念事業に関する募金に同窓生皆様の格段のご協力をお願い致します、と挨拶されました。横島校長は、母校の近況を詳しくご

説明され、特に、平成28年度入試の合格状況、部活動加入者数が県内県立高校第1位、多くの行事は生徒自身が委員会を組織し主体的に企画運営している、「一高祭」は毎年延べ6000人以上の来校者が有りたいへん盛り上がる行事となっている事等のお話があり、「自主」「協力」「責任」の校訓の下、現役学生達の活躍が目に見えるようでもありました。この後、県庁進修同窓会中根副会長のご発声にて乾杯、懇談の時間となりました。楽しい有意義な時間があっという間に過ぎ、最後に全員で校歌を斉唱。毎回多勢で参加して下さる常陽亀城会広瀬会長の中締めで宴のお開きとなりました。幹事の皆様方にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

(水戸支部長 大竹 伸二)



幡谷グローバル奨学基金を設立

平成28年10月11日、「土浦第一高等学校幡谷グローバル奨学基金」の贈呈式が、茨城県信用組合本店で行われました。

この基金は、生徒の海外研修等の補助など、本校の国際教育をより一層充実発展させ、国際的に活躍できるグローバルな人材を育成することを目的に卒業生である元進修同窓会会長の幡谷祐一氏(県信用組合会長・中40回)、茨城ヤナセ相談役の幡谷剛司氏(高3回)、現進修同窓会会長の幡谷浩史氏(茨城トヨタ自動車会長・高4回)のご兄弟3人の寄付金により設立されたものです。

贈呈式では、幡谷祐一氏と幡谷浩史氏の両名から横島校長に目録が贈呈され、次に横島校長から、感謝状が贈呈されました。

幡谷祐一氏は「父親の仙三郎もお世話になり、兄弟3人全員も土浦一高で学んだ。土浦一高で習ったことはひとつの誇りになっているので、今後とも頑張つてほしい。」と挨拶され、それを受けて横島校長は「土浦一高をますます発展させ、世界で活躍するグローバルな人材を育てていきます。」と力強く語りました。



県外文化財視察報告

日本館活用委員会委員長 助川博夫(高21回)

今回の視察先は埼玉県立深谷商業高等学校記念館。6月26日(日)、梅雨只中の時期ではありませんでしたが、幸い当日は天気にも恵まれ、日本館活用委員会を中心とした二行15名は気分も晴れやかにマイクロボスに乗り込みました。

視察先を決定するに際して、県教育庁文化課大塚健司氏(高40回)から助言をいただき、更に氏から「魏峨壮麗の二層楼」と題するDVDを拝借することができました。DVDには深谷商業高等学校記念館(別名二層楼)の修復復元工事に至るまでの経緯(同窓会の果たした役割など)、或いは復元の際のいくつかの問題点(特に創建当時の塗装の色)、それらの問題の解決に至るまでのプロセスが映像として克明に記録されていました。

二層楼は大正11年竣工、平成12年に国登録有形文化財に指定されるなど、本校旧本館に比べて比較的新しい建造物ではありますが、何よりも当時の設計事務所長が彼の辰野金吾の最後の弟子前田松韻氏であり、平成23年に開始された半解体修復工事の経費が約4億円であったことなど、旧本館の場合との相似性があり、4月当初の活用委員会に於いて、視察先として相応しいとの同意を得ることができました。前後して、視察先がNHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」の舞台となつているという情報が入り、あの緑色の壮麗な校舎(ドラマではとと

姉ちゃんが通学する女学校)に対する我々の期待はいやが上にも高まりました。



今回の視察目的は旧本館の修復復元が成った後の具体的な活用・運営方法を学ぶことでしたが、深谷商記念館の場合は、設備面で大幅な改修がなされており、ほぼ全室に空調が備わり、各室の照明も日常の教育活動のために十分な明るさがあり、障害者の方にも利用するという前提で、段差にはスロープが設けられ、更に多目的トイレまで完備していました。一般公開は毎週日曜日、同窓会担当者お一人の奉仕に頼っているのが現状でした。「朝ドラの影響で来館者が大幅に増えつつあり、今後の対応を検討中」(小川原教頭先生)との説明がありました。

設備面に関してはまさに羨ましい限りでしたが、これも登録文化財と重要文化財との違いであり、我が日本館の場合は改修に当たって、特に文化財としての価値を損なわないことが前提ですので、活用優先の改修は難しいということを今回の視察を通じて改めて痛感しました。2年後の旧本館の新たな開館に向けまして、会員の皆様方のお一層のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

母校だより

第69回一高祭

3年E組 佐々木勇輝

今年度も無事、第69回「一高祭」を6月4日(土)、6月5日(日)の二日間にわたって開催できたことうれしく思います。私自身としまして、長い歴史を持つ土浦一高の69人目の文化祭実行委員長として名前を残せたことは大変光栄に思います。

年に一度開催される土浦一高の文化の祭典「一高祭」。そもそも「文化」というものは何でしょうか。ある辞書には「人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体」とありました。発想豊かな一高生が作るユーモアあふれるクラス企画、部活動が行う多様な企画、ハイテクオリティなアート、土浦一高ならではの学術性の高い企画……。まさに土浦一高の「文化」が「一高祭」には詰まっています。

第69回「一高祭」を象徴するものがテーマである「観覧車」です。ゴンドラが輪を作っている観覧車のように生徒1人1人が輪を作って文化祭を通じて絆を深められるようにという願い、また個々のゴンドラが1つになってお客さんを楽しませるように生徒1人1人が一体となってお客さんを楽しませられるようにという願いの2つが「観覧車」には込められています。



だが、それらを見事に体現してみせる第69回「一高祭」となりました。入場者数こそ5256人と伸びませんが、それでもこれだけの多くの人に土浦一高の「文化」を楽しんでもらえ、満足していただけたのは実行委員長として嬉しい限りです。

さて次回の一高祭は記念すべき第70回の開催となり、そして土浦一高も創立120周年という節目の年を迎えます。第69回「一高祭」は単なる通過点に過ぎません。これまで積み重なった歴史をもとに、これからも土浦一高の「文化」は発展して行きます。既に第70回「一高祭」は成功に向けて動き出しています。後輩たちはどんな一高祭を創り上げていくでしょうか。第70回「一高祭」に足を運んでいただけたら幸いです。

SGH海外フィールドワーク

SGH推進室長 豊島 卓

平成26年度、文部科学省からスーパードグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け3年目を迎えました。今年は、2年生17名を8月16日～21日、4泊6日の日程で、シンガポール・マレーシアへ、同18名を8月15日～21日、5泊7日の日程で、オーストラリアのタスマニア島とシドニーへ派遣しました。

シンガポールでは、本校金井大貴先生の紹介で、Dunman High Schoolを訪れました。全校集会で2000人を前にした英語での本校紹介、授業参加、日本文化研究部生徒とのディスカッションおよび文化交流、学食での交流ランチ等を通し、現地の高校生活に触れ、日本との相違を知り、自らの生活・文化を客観視する貴重な体験をしました。マレーシアでは、Malaysia-Japan International Institute of Technology (マレーシア日本国際工學院) 杉浦則夫教授(高20)ご指導のもと、各グループの研究テーマを踏まえ、現地の大学生と一緒にフィールドワークを行いました。

タスマニア島では、筑波大学で教鞭をとった経験のあるPeter Willson先生(タスマニア大学教授)のご協力、南極海生物の生理メカニズムの講義、地球科学に関する研究室の訪問、マウントフィールド国立公園でのフィールドワーク、



Bonorong Wildlife Sanctuaryでの、傷ついた野生動物の保護と自然に戻す取り組みについての議論を考えを深めました。また、シドニーでは、損害保険ジャパン日本興亜のご協力で、オーストラリア支店長の桜井洋先生から、「グローバルビジネスの世界で活躍するために」という演題の講義をしていただきました。

海外フィールドワークでは学ぶことが多くありました。この経験を踏まえ、各グループでの研究をさらに深化したものにしたいと思えます。

職員室だより

国語科より

国語科主任 藤田 大輔

こんにちは。本年度国語科主任の藤田大輔(高54回卒)と申します。今回は国語科の番ということ、簡単に現在の国語科の様子を紹介いたします。

われわれ国語科職員は9名おります。長谷川充尋(本校9年目・1年担当)、原幹子(本校10年目・1年担当)、大野岳志(本校5年目・3年担当)、中島貴美子(本校1年目・3年担当)、阿久津祐子(本校1年目・2年担当)、櫻井明美(高37回卒・本校5年目・3年担当)、小島幸夫(本校6年目・2年担当)、市川真人(高47回卒・本校10年目・2年担当)、藤田大輔(高54回卒・本校4年目・1年担当)です。

さて、国語科職員室の様子ですが、本館の3階と4階に担当学年ごとに分かれています。教科内で連絡を取り合う際は階段の上り下りが少々面倒ですが、こまめに情報を共有することを心がけております。その代わり、教科の職員室で唯一、生徒たちが学ぶ教室のすぐ隣に位置しているという利点もあり、生徒とのコミュニケーションがとりやすく、生徒が休み時間や放課後に気軽に、質問に来られる雰囲気を作られています。

国語科は授業を行う上で読みこなさなくてはいけない資料も多く、毎日の教材研究も大変ですが、それ以上に定期考査の問題作成と採点に多くの時間がかかります。問題作成においては生徒の力を少しでも伸ばしてやれるように、また採点基準ははっきりするように、問題文の一言一句に細心の注意を払っています。考査後は学年担当者同士が顔をつきあわせて生徒の答案を一枚一枚見比べ、統一された基準で採点が行われるよう綿密な打ち合わせを行っています。

ます。平日はもちろん夜遅くまで、休日も部活動等の指導の合間を縫って採点作業に勤しむ姿は、本校職員の先輩方から代々受け継がれているものです。

そんな日々を過ごしているわれわれ国語科職員ですが、いつも明るく和やかな雰囲気です。普段の何気ない会話の中にも詩の一節や小説の一部分を引用したりして、アカデミックな笑いのあふれる職員室です。特に今年度は教科内でも一年下の私が教科主任ということもあり、さまざまな課題に対してもチームワークでカバーしております。

今後も国語科一同、将来を担う生徒の育成に尽力して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。



スティーブが授業の追加やプリントの補修を国語科職員室の前で

テニス部

部活動報告

本校はテニス部とソフトテニス部が共存・共栄している数少ない学校だと思います。ここではソフトテニスの方ではない、黄色いボールを打つ方のテニス部の活動報告になります。

現在、男子部員15名、女子部員

10名の合計25名で活動しています。顧問は横倉、井川、森田の3名です。学期中はオムニコート1面で、長期休業中には午後、コート3面を利用して練習をしております(午前はソフトテニスの練習時間となっています)。

部員数に対して練習に利用できるコートの面数が少ないのが悩みです。そのために、部員全体を2チームに分けて、ボールを打つ時間とフイジカルトレーニングの時間に分割して、コートで練習する部員数が半分に異なるような工夫をしなければなりません。

夏休み中には恒例の夏合宿を2泊3日で、本校の進修記念館にて行います。今年は8月9日、11日で行いました。25名の現役部員に対して、6代に亘る22名のOB・OGが練習の応援および指導に訪れてくれました。合宿所は食べきれないほどの差し入れの品でいっぱいとなりました。夜は顧問を交えてOB・OGが旧交を温め、思い出の話は尽きず、合宿所の灯が消えたのはとても遅い時間となりました。



戦績の詳細は本校HPに掲載されていますが、ここでは直近のもののみをご紹介します。今年度も昨年度に引き続き、女子団体会で関東大会とインターハイの県予選にて準優勝しました。また、関東県予選の女子個人ダブルスでも、関怜莉(3年)・木村みれい(2年)ペアが準優勝し、関東大会に出場しました。インターハイ県予選では女子個人シングルスにて関が優勝し、インターハイ本大会で3回戦に進出し、2年連続で全国ベスト32という快挙を成し遂げました。



前出の関怜莉さんの言葉に、部のモットーが現れています。それは「テニスを通して多くの人と出会い、人と励ましあい、その励ましに応えるために努力をする」ということです。同窓会の皆さま、今後とも一高テニス部をどうぞよろしくお願いいたします。

最近の定時制の様子

土浦一高定時制では、「基礎学力の定着と分かる授業の実践」を目標として、全職員が一丸となり、一人一人の能力を把握し、個に応じた授業を行っています。今年度は、夏季休業中に三修三卒希望者、

就職希望者対象の課外を初めて実施し、多くの生徒が参加しました。生徒たちは、四月から数多くの学校行事や生徒会活動の中で多くの事を学び、教師と生徒または生徒同士のコミュニケーションをとおして、より良い人間関係を築こうとしていきます。また、毎週月、水、金の放課後には、多くの生徒たちが文化部や運動部などで活躍する姿を見ることが出来ます。そのような学校生活の一端を紹介いたします。

一 熊本地震募金活動

生徒会の自発的な活動により、全校生徒から多くの寄付を募ることができました。募金活動を呼びかけた生徒会長は、「熊本の地震をニュースで知ったとき、五年前の東日本大震災を思い出し、居ても立っても居られない思いがしました」と心境を語ってくれました。

二 道徳「心をえがく」

道徳のゲストティーチャーに、山崎理恵子県定通教育振興会長さんをお招きしました。生徒たちは、山崎さんの話を聞き、いただいた大きな白いキャンバスに向かって、筆や素手でそれぞれの思いを描いていました。絵はまだ完成していませんが、秋の星光祭(文化祭)に向け仕上げていきたいと思っております。



自分の気持ちを絵で表現

三 県定通体育大会での主な結果
六月五日(日)に行われた試合には、五種目二十七人が出場し、四種目十三人の全国大会出場を勝ち取ることができました。

- 卓球部 個人優勝
- 柔道部 個人二位、個人三位、個人優勝、個人二位、個人四位
- 剣道部 個人優勝、個人二位、個人四位
- バドミントン部 シングル優勝、ダブルス二位



バドミントン部の選手たち

四 校内球技大会

多くの学校行事の一つでもある球技大会では、全校生徒が卓球、バドミントン、バスケットボール、ドッジボールの四種目に全力で挑みました。

普段教室では見られない、元氣な明るい笑顔がたくさん見ることができた一日となりました。



クラス代表バスケット選手

進路状況報告

東大・京大
東工大・一橋大 25名

東大18名合格
筑波大47名で全国トップ

進路指導部長 木村 幸彦

平成28年度入試は、全教科で新学習指導要領のもとで実施された。前年度は、過年度生に対しては移行措置がとられたが、今年度は、移行措置のない純粋な新課程の入試となった。大学生の就職状況の改善と新課程での理科の負担増により、長年続いた「文低理高」が、昨年あたりから沈静化した。さらに、理系のセンター試験平均点ダウンにより、国公立大学の志願者数は、5年連続で減少した。一方、私立大学の志願者数は、入試方式の複線化・多様化、国公立大学への敬遠傾向による併願校の増加などにより10年連続で増加した。センター試験志願者数は、約56万3千人で、前年度より約4、600人の増加であった。国公立大の志願倍率は4・66倍(国立4・22、公立6・39倍)で、前年度の4・67倍よりやや低下し、5年連続の減少となった。本校生の多くが受験する難関大では、京都大、東工大、北海道大、一橋大、九州大が増加、東北大、名古屋大、神戸大はやや減少、東京大は大幅減少であったが、後期廃止によるものであり、難関大全体としてはやや減少であった。学部系統別では、理系

は、前年並みから減少の系統ばかりであったが、文系は、「社会」の大幅増加をはじめ、「経済・経営・商」「法」「国際関係」など多くの系統で増加した。

センター試験の本校生の平均点は、文系が649・9点(前年比マイナス15・6点)、理系が645・0点(前年比マイナス31・3点)で、やや苦戦したが、例年通り、第一志望(主に難関国立大)を最後まで諦めずに挑戦した生徒が多かった。

入試結果について、主なものを挙げると以下のようである。

東工大18名(新卒7名)
京都大学3名(新卒1名)
東工大2名(新卒2名)
一橋大学2名(新卒2名)
東北大12名(新卒6名)
筑波大学47名(新卒37名)
国公立大医学科17名(新卒6名)

東大は昨年度23名、今年度18名と5名減少した。現役生は、文系に2名、文三に1名、理一に2名、理二に1名、理三に1名の計7名が合格、理三合格は、19年ぶりであった。地元筑波大は47名(内医学類8名)合格で全国トップ、北海道大は11名、東北大は12名が合格した。昨年度より合格数が減少してしまっことは否めないが、現役生も過年度生も難関国公立大を目指す姿勢を崩さずによく健闘したといえる。昨今、高校・大学の教育改革及び高大接続の入試改革が急速に進んでいる。今後は、より一層情報収集に努め、学習指導・進路指導の充実を図っていき

平成28年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

大学	合格者	新卒
旭川医科大	1	
北海道大	11	8
東北大	12	6
秋田大	2	2
茨城大	16	15
筑波大	47	37
宇都宮大	1	1
群馬大	2	1
埼玉大	2	2
千葉大	9	7
お茶の水女子大	7	5
電機通信大	1	1
東京大	18	7
東京医科歯科大	1	1
東京海洋大	1	1
東京外国語大	2	2
東京学芸大	4	2
東京芸術大	1	1
東京工業大	2	
一橋大	2	
横浜国立大	3	3
上越教育大	1	1
富山大	1	

大学	合格者	新卒
金沢大	1	
信州大	5	4
静岡大	1	
浜松医科大	1	
名古屋大	2	
名古屋工業大	1	
京大	3	1
大阪大	5	2
神戸大	2	2
広島大	1	
山口大	1	
熊本大	1	
大分大	1	
宮崎大	2	
秋田県立大	1	1
首都大東京	2	1
国公立大計	177	114
(うち医学科)	17	6

大学	合格者	新卒
青山学院大	17	10
学習院大	9	4
慶応大	25	7
国際基督大	3	3
上智大	9	6
中央大	30	13
津田塾大	5	4
東京女子大	5	1
日本女子大	6	4
東京理科大	73	32
明治大	52	32
立教大	19	15
早稲田大	55	31
法政大	34	18
北里大	9	4
芝浦工大	13	6
日本大	27	15
立命館大	5	1
その他	140	74
私立大計	536	280
合格者総数	713	394

平成27年度 進修同窓会決算書

収入総額 12,421,685円
支出総額 9,535,650円
差引残額 2,886,035円(平成28年度へ繰越)

平成28年度 進修同窓会予算書

収入総額 12,697,000円
支出総額 12,697,000円
差引残額 0円

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(△), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 繰入金, 寄付金, 雑収入, 合計.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較残額(△), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 繰入金, 雑収入, 合計.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額(△), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 生徒活動特別補助費, 旧本館改修促進費, 予備費, 合計.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較残額(△), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 海外研修旅費, 旧本館改修促進費, 予備費, 合計.

上記のとおり決算しました。

平成28年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成27年3月31日

監事 熊足 木 郎
監事 足松 寛 作
監事 松 泰 寿

上記のとおり提案いたします。

平成28年4月9日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

*項目間の流用を認める。

平成29年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会・卒業周年記念祝賀式は、次の通り開催いたします。

- 一、期日 平成29年4月9日(日) 午後1時
二、場所 土浦第一高等学校体育館

卒業周年 記念祝賀式

- 卒業60周年 高9回、定7回
卒業50周年 高19回、定17回
卒業40周年 高29回、定27回
卒業25周年 高44回、理21回、定42回
卒業15周年 高54回、理31回、定52回

一般会員・周年記念該当会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

会費納入のご協力をお願いします。平成27年度会費納入状況は、2,655名の皆様から9,535,000円を納入していただきました。...

編集後記

現在、旧本館校舎(国指定重要文化財)の耐震改修工事が進められています。解体工事現場を何回か見学する機会がありました。...

来年11月18日(土)には、「120周年記念式典」が予定されています。...

心からご祈念申し上げます。

住所変更手続きのお願い
住所や電話番号等を変更された方は、左記のEメールへ送信下さい。...

進修同窓会会報第73号
発行日 平成28年12月1日
校内
矢川 山田
口上 戸田
鈴木 大久保
倉持 井塚
櫻井 塚
大塚 塚
久保 塚
鈴木 塚
竹井 塚
高井 塚
草野 塚
富永 塚
飯村 塚
豊村 塚
長崎 塚
山田 塚